

ジュルチャーニイは社会党の救世主になれるか

盛田 常夫

夏休みも終わりかけた8月中旬、ハンガリーの政界は激震に見舞われた。経済大臣の更迭で内閣改造を図ろうとしたメツジェシ首相にたいし、チラグ大臣を送り出しているSZDSZ（自由民主連合）が反発し、当初はメツジェシの内閣改造を支持していた社会党幹部会も、連立維持の観点から落ち目のメツジェシを切り捨てて、事態の打開を図ろうとした。しかし、事は二転三転して、社会党幹部会が意図せざる方向に走り出すことになった。

政権クーデター？

メツジェシ首相はテレビ・インタビューで一連の動きを「クーデター」と批難し、首相引き下ろしを画策したのは、SZDSZと手を組んだジュルチャーニイであり、それを容認した社会党幹部であるという意味のメッセージを放った。選出母体の社会党と、自分が抜擢したはずの子飼いのジュルチャーニイに手を噛まれたと言いたいのである。

しかし、「一寸先は闇」と言われるのが政治の世界。もともと政党に基盤のないメツジェシは政治家というよりは、官僚的調整能力でこれまで生き延びてきた人物。旧体制と新体制の双方で大蔵大臣を歴任するという稀な経験をもつ人物だが、性格的には温厚で、政治家には向かないタイプ。外に向かって新鮮なイメージが創れる人物でもない。「可もなく不可もなく」という官僚出身者。

SZDSZにすれば、メツジェシには貸しがある。首相就任直後に旧体制の諜報機関のエージェントであることを暴露されたメツジェシを擁護し、首相の座を守ってやったという自負がある。メツジェシ内閣の不評を、SZDSZ出身の経済大臣の更迭で済ませるのはけしからんと考えるのも、理解できないことはない。メツジェシには事前に根回しし、連立二政党の了解をとって大臣を

更迭するという力量がなかったのだろう。そこが政治家でない弱み。泥臭いやり取りを避け、いきなり記者会見で大臣の更迭を発表するのは、やはり政治の素人。形勢が不利と見るやいなや、辞任の意思を発表するのも唐突だった。

突然のトップ交代は良くあること。メツジェシ内閣の不評はもちろん連立を組む政党の不評だが、大臣を代えて済む程度の不評でないだろう。だから、社会党が政府の顔を代えて、政治のトレンドを変えたいと考えるのは、政党としては当然のことで、クーデターと呼ぶには大きすぎる。メツジェシは、選出母体から見放された悔しさを訴えたかったのだろう。

社会党の混乱

社会党幹部会は素早く、メツジェシの後任に、社会党の幹部で無任所大臣のキシユ・ピーテルを推すことを決めた。そこまでは良かった。ところが、今度は社会党の下部組織から猛烈な突き上げが来た。何故、キシユだけを推薦するのか、ほかに候補者がいないのか、候補者選出過程を透明にできないのか、天下りの決定の仕方は旧体制のやり方そのものだ、等々の批判が噴出して、急遽、首相候補者を選出する臨時の党大会を8月25日に開催した。そして、投票にかける首相候補者がキシユとジュルチャーニイの二名に絞られた。

臨時大会は社会党幹部会と地方組織との対決の様相を呈した。キシユを推したのは現在の社会党の指導者陣で、ジュルチャーニイを推したのは地方組織の代表者たち。投票の結果は、466票対166票。圧倒的多数で、大会はジュルチャーニイを首相候補に選出した。キシユは守旧派、ジュルチャーニイは改革派というわけである。まるで小泉首相選出過程のハンガリー版を見ているようだ。

この結果に、社会党幹部会は面目丸つぶれとなった。幹部会が不信任されたに等しい。これで10月に控える社会党大会は、党の指導権をめぐる激しい闘いが繰り広げられる場になりそうだ。さらに、この混乱に輪をかけたのが、メッジェシ辞任の手続き。メッジェシが辞表を大統領に提出する場合には、大統領が首班指名の提案をすることになるが、それでは連立政党が合意した政治家が選出される保証がないし、首班指名までかなりの時間を要する。だから、社会党とSZDSZは、9月の国会開会時にメッジェシ首相不信任案を可決し、間髪を入れずに新首相を選出することで、首相不在の時間をなくそうと考へた。しかし、これは法理を無視した政治的便宜主義だ。だが社会党は時間を節約するためとして称して、不信任案で首相交代を図りたいとメッジェシに打診したのだ。

しかし、常識的に考へて、いくらなんでも、クーデターを起こされたメッジェシが不信任案可決という手続きを受け入れるわけがない。案の定、メッジェシは社会党臨時大会の投票が終わった頃合いを見て、大統領への辞表提出の記者会見をおこなった。これがメッジェシの最後の抵抗だった。この日から算定して、30日間はメッジェシがハンガリーの首相としてとどまり、その暫定期間が終わったところでマードル大統領が新しい首班候補を指名する。

こうして、社会党幹部会は党大会での完敗に続き、メッジェシ更迭の手続きでも失策を重ねることになった。今回の一連の騒動の最大の敗北者が社会党幹部会といわれる所以である。

社会党のオルバン？

旧体制のエリートたちが依然として党の指導部にいる社会党は、未だ世代交代に成功していない。他方、FIDESZはオルバンをカリスマに仕立てる手法で、若者の支持を呼び込むことに成功した。社会党の下部組織にしてみれば、社会党にも「社会党のオルバンが欲しい」。若くて、大衆受けのする政治家を求める期待は、社会党

組織内部に沈潜していた。それがメッジェシ辞任で、大きく動き出した。

ハンガリーはこれまで社会のリーダーに、カリスマ的な強い個人を抱くことはなかった。旧体制のカーダールは他の社会主義国の指導者と違い、性格的に温和で個人的独裁政治を敷くというタイプでなかった。この観点から見ると、ハンガリーは他の社会主義国より社会的成熟度が高く、現社会党指導部も、「社会党にオルバンのような独裁者は必要なく、様々な潮流を抱える多様性が特徴なのだ」と説明してきた。

しかし、今の若者を見ると、どうもカリスマ登場を期待しているような気配を感じる。社会が複雑になりすぎて、あらゆるものが個人ではどうしようもない水準に発展してきた。それはそれでいろいろな利点を楽しむことができる可能性を与えているのだが、精神的心理的には満たされないものが残る。言い表せない不満や閉塞感がカリスマを求める。自分に代わって閉塞状況を打ち破ってくれる人物の登場を期待する。代理的要望充足の期待だ。こうとでも考へないと、最近のオルバン人気を理解できない。だから、社会党下部組織にもこの社会的潮流に棹さし、人気を回復したいという期待があるだろう。

オルバンとジュルチャーニイは年齢や育ちが似ている。ともに地方の労働者家庭出身で、ブダペストの知的エリートの出身ではない。しかし、外見では異なる所が多い。オルバンからは成り上がりの「ツッパリ」の印象を受けるが、ジュルチャーニイにはブダペストの良家出身の風貌がある。また、ジュルチャーニイの演説には、オルバンのように決断が速く実行力があるという印象を植え付けようとしている努力が見え見えだが、まだまだ板についていない。もっとも、オルバンも今では演説はうまいが、政権を取るまでは学生運動のアジテーションだった。ジュルチャーニイも場数を踏めば変わるだろう。

政治家としてのタイプとしても、オルバンとジュルチャーニイはかなり違う。それは党の成り立ちからも来ている。FIDESZはオルバンが一人で作り上げた党。だから、良し悪しは別とし

て、オルバンにはカリスマとして振る舞う習性がついている。それは個人的トークにおいても変わらない。

ところが、テレビのトークショウに出たジュルチャーニイの印象は、壇上で演説するこわばった印象とはかなり違う。オルバンに比べて、率直にいろいろなことを話すタイプだ。オルバンの独裁は社会党内部では通用しないだろうから、ジュルチャーニイはいろいろな派閥との駆け引きや交渉が必要になる。そこでは、率直さが重要な資質になる。多分、党の青年組織を経由し、ビジネスの世界を経験したジュルチャーニイには、党官僚出身者にはない資質が備わっているだろう。それが党の下部組織に受けるのではないか。各種のマラソン大会に出場するという大衆性もある。その意味で、これまでの社会党の政治家とはひと味違う政治家だと言える。

転機を迎えた社会党

10月の党大会を契機に、ハンガリー社会党は大きく変貌するだろう。また、そうでなければ、次の総選挙では勝てない。遅れてやってきた世代交代が、今、社会党の中で始まると見て良い。社会党の主導権は60歳代から30~40歳代に移るだろう。それがまた、社会党が新時代に生き残る条件でもある。

他方、不安があるとすれば、ジュルチャーニイの蓄財だろう。ジュルチャーニイは社会主義労働者党（ハンガリーの共産党）の青年組織（KISZ）幹部を経験し、体制転換で実業家に転身した億万長者である。億万長者ランキングに顔を出し、総資産額は数十億フォリントと言われる。絶対額としてはそれほど大きくはない。だが、ほんの15年前まで政治組織の幹部だった若者が、どうしてやってこれほどの蓄財に成功したのか。明らかに、党や青年組織が所有していた資産（不動産や企業）の有利な取得なしには、蓄財は不可能だっただろう。この蓄財過程の隠された部分は、野党勢力が攻撃目標にするだろう。

このような蓄財で成り上がった実業家が政治家に転身し、政治のトップに上り詰めるという現象は多かれ少なかれ、すべての体制転換諸国に見られる。大統領ポストを狙ったロシアのホドルコフスキーなどのロシアのオリガーク（億万長者）は皆、旧体制の共産党の青年組織の指導者の経歴をもち、体制転換のどさくさに紛れて蓄財した連中である。その鋭い嗅覚を政治権力奪取に向けた動きが、プーティンとの軋轢を生んだ。しかし、この種の軋轢は多かれ少なかれ、すべての体制転換諸国に見られる現象だ。

ヨーロッパ社会は日本と違い、個人的蓄財に反発する者がいても、社会的倫理悪として排除しない。政治であれ経済であれ、権力とはそういうものだという諦念に似た「常識」が社会に流れている。この点で、東西ヨーロッパの違いはない。イタリアのベルススコーニイ首相の事例が良く教えている。日本のように政治倫理だけで政敵を倒すことはできない。これがヨーロッパ社会。ハンガリー社会も例に漏れない。

オルバンも地位を利用して、親父の砂利採取事業に巨額の融資を引き出しているし、テニスコーチを閣僚会議顧問にしたり、何種類かの公用車を私的に利用したりしていた。

経済活性化につながるか

当然のことながら、政府の顔が変わったぐらいでハンガリー経済が好転することはない。期待できるとすれば、ビジネスマンの目から市場経済の発展を阻害している税制や慣習を排除して、市場経済の活性化への施策を講じることだ。有能な人材を適材に配置し、思い切った施策が打てるかどうか。

メッジェシは意固地になることなく、即座にジュルチャーニイを副首相に任命して、政権委譲に備えた。いつまでもクーデターと騒ぐことなく、権力委譲に備えたのは大人の態度。二度の大蔵大臣に加え、首相まで務めさせてもらったのだから、不満など言えないはずだ。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）